星田の里の四季

佐藤義也

――これは、昭和四一年に書いた文章です。

星田の里には昔のままの自然が残っている。

それは、わたしが、幼少のころに馴染(なじ)んだ自然であり、もう記憶のなかにしか存在しなかった自然でもある。

遅い梅の花が散り果てないうちに、星田の里は、桜のかすみに包まれる。都会より気温が低いせいか、早春は、いつまでも霜が降り、桜はまだかまだかと待ちわびると、突然、一夜明ければ、里一面、花に埋め尽くされている。同じころ、里山がいっせいに薄桃色の衣をまとう。三つ葉つつじで、色は浅いが、花弁が大きいので、山一面に群生するさまは、桜の見事さと少しも変わらない。

つくしは、摘むのに辟易(へきえき)するほどに群がり出る。わたしたちは、よく野辺に出てつくしを摘み、ほろ苦い味を、飽きもせず食膳に供した。

野辺にれんげの紅(くれない)が一面に広がるころには、晴れ渡った空に、葉桜の美しい季節が訪れている。里山には、いっせいに新緑が萌え、強風の日には、葉がいっせいに裏返り、山の緑が白みを帯びて光る。

そのころ、わたしたちは桜の若葉で桜餅をこしらえ、里の緑の香りを満喫する。

皐月晴(さつきば)れの日々が続くうちに、里は濃い緑に変わり、畑では、赤いイチゴの実が熟れはじめる。狭い畦道(あぜみち)がイチゴ狩りの人たちの姿でにぎわい、いく粒も入らない小さなカゴを誇らしげに携えた人影がいくつも通りすぎていく。

その足元では、すでに苗代(なわしろ)で苗が芽を吹き、朝など、緑の毛先に細かな露がこびりつき、真珠の粉のように陽の光に輝く。

農家の生垣には、小さなつるバラの花が群がり咲き、あじさいはようやく葉がそろい始める。

もう夜になると、苗代の蛙の声が騒がしい。

畑では桑の実が黒く熟れ、みずみずしい酸味に、つい度を越してほおばると、手も舌も紫に染まり、洗っても容易におちない。桑の実が黒ずむと、イチゴの季節が終わり、やがて田植えが始まる。ところどころで、まだ、牛が犂(すき)を引く光景が残っている。

夜、農家のかなり大きくなった紫陽花(あじさい)の花に、はや蛍の青い火が点滅していたりする。早速、わたしたちは、天の川の清流へ蛍狩りに出かける。危なげな私市橋に立つと、天の川の流れに沿って飛ぶ蛍が、つぎつぎと橋のうえを行(ゆ)き交(か)う。蛍が、懐に飛び込んできそうに思われる。何匹かを懐に持ち帰り寝室に飛ばして初夏を遊ぶ。

そのころ、星田の里には、はや梅雨の季節が訪れているのである。

年の暮れが迫ると、野辺は冬枯れて、あちこちの田んぼに小さく

積み上げた藁束に北風が鳴る。村はずれの地蔵堂の銀杏（いちょう）の木は、時雨（しぐれ）ふくみの冬空に、針のような梢を突きたてている。

点在する家々を囲む木々は、柿も桜も楓もみな、とがった梢を神経質そうに低い曇天にかざしている。

路傍に群がるススキは、突風に枯葉をかさかさ鳴らしながらも、古い穂先を、頑固にふり立てて曲げようとしない。

さえずりだけが聞こえていた雀の群れが、思い出したように、次の畑へといっせいに鳴き渡る。

一日のうち時々しか走らない片町線の蒸気機関車が通ると、冬風に途切れがちの汽笛が、ふと、野辺を渡ってくる。　おわり

当時の写真１．昭和４４年ころ

◇私市植物と阿茶谷線の間のれんげ畑。水田に窒素肥料を得るため、どこでも植えられていました。

当時の写真２．昭和４２年ころ

◇ススキは、どこにでも生えており、銀色の穂綿をなびかせていました。

当時の写真３．昭和４２年ころ

◇現在の妙見口から私市方面を望む。この上を妙見川が流れていました。